である。

博士は学問のことになると、いつも御気嫌よく話して下さるので、学生にはとても有り難い存在であつた。まつたく学究的な超俗的なお人柄であつたのである。

私が昭和三十二年に修士課程を終了することになつたのも、博士の御指導があつたればこそである。しかしながら、教育事務に明け暮れして、その後ひさしくおたずねする機会を得なかつたが、突然、御逝去せられたことを知り、悲しみの念に耐えず、学界の支柱を失つたような寂しい気持でいつぱいである。平常はあまり病気などなさらなかつたのにと思い、これが運命とでもいうのであろうか、まつたくわからないような気持がもる。

幽明とところを異にして、ふたたび、温顔を拝することができなくなつた今日、ひたすらその学恩を偲び、謹んで哀悼の意を表しますとともに、御冥福を心からお祈り申し上げる次第です。—昭和三十七年七月十一日—（昭和二十六年三月卒、大阪府立寝屋川高等学校教諭）

不肖の弟子

大橋清秀

親戚の結婚のことで旅先にいた間に、後藤丹治先生は急逝された。帰宅してはじめて先生の訃を知つたわたくしは、御葬儀のお手伝いも出来なかつた。旅をしていたことが悔まれた。

わたくしが卒業論文和泉式部日記研究（校本篇・研究篇・附篇）を書くために資料をあつめていた頃、図書館のうす暗い書庫の中で先生におめにかかつたことがあつた。書庫の片すみで調べものをしておられた。その時の先生のお姿がわたくしの脳裏にやきついている。

そしてその時、先生のお世話で、群書類従所収和泉式部日記の板本を借覧することが出来た。昭和二十二年十月のことであつた。まだ物の不自由な時だつたので、水に強い洋紙をさがして来て、必要な大きさに切り、知人に依頼して青写真の薬をぬつて貰い、子供のころに遊んだ日光写真のように太陽光線で焼きつけては、たらいの中の水で洗い、かげぼしをするというまことに原始的な方法で複製をつくつたのであつた。今、その青写真の複製本をみてみると、末尾に、「後藤丹治先生の御厚意により立命館大学図書館本を借りてうつす」と墨書してあつた。このほかに、たしか先生の御蔵書の扶桑拾葉集もお借りしたとおぼえている。

わたくしがはじめて先生の教えを受けたのは、昭和十八年の春のことであつた。

後藤丹治先生は、わたくしにとつてやさしいけれどこわい先生であつた。先生とのお話は、学問についてのことばかりで、いわゆる雑談のたぐいは本当に稀であつた。勉強していなければ、先生とのお話がとぎれてしまうように思われた。いつでも温顔で、懇切に質問に答えて下さつたが、先生御自身の学問に対するきびしさが、いやというほど伝わつて来るのであつた。わたくしはいつになつたら、先生と楽にお話が出来るような自分になれるのだろうかと思うと心細かつた。

先生の学問の偉大は、先生から離れると一層はつきりとわかつて来るのである。

雨の降る日、わたくしは先生のお写真の前に坐っていた。

もう、先生にお礼を申し上げることも出来なくなってしまったのである。

—三八・七・一一—

（昭和二十三年三月卒、大阪工業大学助教授）

後藤先生と御所

岡本彦一

それは去年の十一月七日であった。

毎年春秋に京都御所が公開される。そのつど、拝観に行きたいと思いながら、なかなか実行できないでいる。この日はうまいことに自由な時間がもてた。この機会をのがさず出かけた。

宜秋門から入って、御車寄から諸太夫間まできた。ここには人形がかざってある。ぼんやりとそれを眺めていたら、そこに後藤先生がおいでになった。先生もそう熱心に御覧になっているようには思えなかった。御挨拶をして、皇学館大学のお話をしたら「誰にききましたか」とおっしゃった。「まだ誰にも話してないのですがね」ともおっしゃった。わたくしもあまりくわしい事は聞いていなかったので、伊勢の方へ行っておしまいになると、何だか京都がさびしくなるような気がしたし、先生もこうして気様に京都の街をおあるきになるということもなくなるのではないか、と思ったので、ついそういう話を出してしまった。やはり、この話題は先生をさびしくさせたような気がしたので、そうそうにひっこめた。そして、あまりものをいわずに先生についてあるくことにした。

新御車寄から、月華門、建礼門を前をぐるりとまわって、日華門から紫宸殿の前に出た。この南庭に立って紫宸殿の屋根をしげしげと見上げた。先生も同じく眺めておられる。戦後はじめて公開したときは紫宸殿の簀子に板が敷いてあって、その上を渡ったことがあった。いまは南庭を横ぎる。そんなつまらない事をわたくしはいった。

清涼殿では時間をかけた。先生は何を考えつつ御覧になっていたか、それはわからない。しかし、われわれ二人は、口に出しては、らちもない事を多く語った。殿上の間の日当りのわるいこと、狭いこと。掃除が行きとどいてないことなど。先生にとっては珍らしいところではないが、しげしげと見た。鬼間、台盤所、朝餉間、東へまわって荒海障子、昆明池障子。燈籠が低くつるしてあって一列に並んでいることに感心したり、昼御座をのぞき込んだり。

外人カメラマンが熱心に撮影していた。わたくしもカメラをもってきたらよかったなどと思った。

小御所の前でもお庭を眺めて立ちつくした。先生は今の学生に古典の読解力のないことをなげかれた。それに対してわたくしは、それは戦後のすばやい時勢の流れで仕方がないといい切ってしまった。

先生は「わたしは平家や太平記のような長いものが好きです」とおっしゃった。これはずい分前にもお聞きしたことがある。「和歌のようなものも、それはよいでしょうがね」ともおっしゃる。これには何ともかえすことばがない。ゆらい、わたくしは外国文学でも「戦争と平和」とか、日本のものでも「夜明け前」とか、ああいう手のものはにが手だ。だが、和歌・連歌・俳諧にばかりこりかたまっているわけではないのだが。

御学問所から御常御殿、ほんとにこの日は